

〔特別寄稿〕

加 曽 利 の 博 物 館

滝 口 宏

I

千葉県で、一遺跡を中心に多少とも展示形式をとって開館しているものは、木更津の金鈴塚保存館、芝山の「はにわ博物館」の2つであった。それにこの加曽利貝塚博物館が加わった。3館とも筆者が関係することのできたのは光栄である。

このなかで、金鈴塚保存館が一番骨の折れたものであった。発掘後、資料を木更津第二高校に置いて整理に通ったが、時間的にも金銭的にも損失が多いので、早く報告したい気持ちも手伝い、遺物を早稲田大学に運んだ。それも数ヵ月後には現地に持ち帰ったが、この間、遺物が大学に取られてしまうのではないかと悪質の噂を誰かが流した。それがごく最近でも一部には信ぜられていて、先日もある委員会の席上、それをまことしやかに口にしかけた者がいた。

事実は、早急の整理をただけで遺物を現地に返したため、研究上には大きな支障になった。その上、資料保存館はすぐにはできず、遺物はふたたび現地を離れて、県立図書館の一室に留めおかれていた。保存館のできたのは昭和31年11月である。発掘が昭和25年であるから、これだけの暇があるのなら、なぜ気持ちよく発掘者に精査の時を与えてくれなかったのであろうか。金鈴塚を想うたびに心の痛むものであり、いまでも誰かが不当な話を伝えていることに憤りさえおぼえる。

これに対して、芝山はにわ博物館はまことに順調に進んだ。発掘、整理、資料館建設と、周囲すべての好意によって円満に進んだ。有難いことである。加曽利貝塚の場合は、調査についての曲折が多すぎた。いずれ筆者なりの見解は述べておきたいと思っている。しかし、資料館は前二者より優れた形で誕生した。千葉市がこれに強く力を注いでいることがおもな原因であるが、県も国も研究者一同も好意をもって、この建設に協力した。

筆者は、かねてから遺物の現地保存を唱えてお

り、(もっとも、施設の整備はされず、単に発掘物だけを物欲しそうにとり上げようとする、最近の一部の県の態度には反省してもらいたい)、それを地方博物館にし、それらの群に横のつながりをもたせ、中央に結ぶという博物館網の組織を強調してきたのであって、金鈴塚も芝山も、この加曽利もその組織の中で活発な活動をすることを望んでいるのである。

II

筆者の考える地方博物館の組織化は、まず県単位に中央博物館(県立博物館)を設置し、全県下の文化財についてのセンターとする。県内主要地に、それぞれの土地を代表する文化財を収蔵し、展示する小博物館(資料館)を設置する。これらは中央博物館の分館とするのではなく、指揮系統をもつ必要はない。それぞれが独立し、同時に協力関係をもつのである。

この協力関係は、資料の交換、研究の協同、教育の協力ばかりでなく、人員の交流をも含むものである。元来、地方博物館は、その地を端的に語る資料を収集し展示するのを例にしている。戦前のドイツにさかんに建設され、戦後アメリカでも各地に小博物館がつくられた。

これには二つの種類がある。その地の風土・歴史一般を述べるものと、その地の特色を強調するために、特殊資料を中心とするものとある。貝塚古墳など埋蔵文化財を中心とする型は後者に属する。偉人・社寺などを主とするものには、以上の類型とちがうものが多い。県内では、伊能忠敬・大原幽学の資料を集めたもの、寺社の宝物館などがそれであるが、後者のなかには成田山の霊宝館(史料館)のように、一般考古資料や民俗資料などを広く収蔵・展示するものもある。

加曽利の博物館は、加曽利貝塚に所在するものであるから、一般博物館ではない。それでも、貝塚を取扱うという点で、加曽利貝塚の出土品に限

る必要はない。埋蔵文化財のうちの一分野について収蔵・展示する役割を持つ。この点、宝物館とは性格を異にする。

中央博物館が統合館であるのに対して、地方博物館はこのような性格をもつのが通常である。したがって、その協力関係はいちようではない。これらに、さらに学校資料室が組合わされる。これを千葉県の実例を挙げると以下ようになる。

県立博物館 目下のところ木更津に計画されているようであるが、複数になるとのことである。木更津には、すでに金鈴塚保存館があるが、それに加えて考古関係を主とするであろう。同様に安房につくれば、漁撈民俗などを重視することがよいであろうし、県の中央におくものは、各方面にわたる一般博物館（総合博物館）となるであろう。

地方博物館 考古関係外のものは別にして、加曽利は貝塚を主とした縄文系統、芝山は埴輪を主とした古墳、別に国分寺を中心とした寺院址資料館、あるいは野田の博物館のように、その地域の資料を集めたもの、その他のものが現にあり、または建つであろう。これらは、その規模において大小あり、設置者もいちようではない。共通することは、文化財に対する認識を深め、保護の実を挙げ、教育の資にしようということである。

Ⅲ

そこで問題になることは、小博物館については、それを建設するまでは強い意志がはたらき、なんとか順調に進むのであるが、それが完成したとき以後、これをいかに保持し、効果あらしめるかの点である。設置団体が公共団体であったとしても、多くの場合、運営費の支出には次第に困難がともなう。入館料収入で運営費をまかなうことはできないのが通常である。したがって、できるだけ費用を節約する。資料保存費さえ最小限度にとどめられる。

次に、人の問題がある。予算に乏しく、訪れる者も少なければ、人の配置に当然関係する。また、有能な研究者が置かれても、研究もできず、本人が失望する。じきには島流しに遭ったような孤独感におそわれる。これでは、館の機能は単にものを収蔵するだけで、それを活用することなどは及びもつかない。これは、やがて館が物置きになることを意味し、その物置き自体不備なものに墮し

てしまう。それを保持する団体にとっては、宝物ではなく無用の長物であり、邪魔ものになってしまおう。これでは博物館にしたために、かえって貴重な遺品を損ずる結果になるのであって、厳重な方法によって秘蔵しておく方がよいということになる。

博物館の機能には、格納保護という静の面に対して、必ず活動という動の面が合せられていなければならない。活動には、教育面と研究面があり、この点大学に似ている。教育を社会教育一本に考えてしまてはいけない。学校教育にも大きな関係がある。研究には、学術研究そのものと博物館に関する研究（博物館学的研究）とがあろうが、問題になるのは前者である。

こうした機能に対応するために、県単位の組織化を提唱するのである。可能ならば、文化財行政に関する人事をも併せておこなうのがよいし、また、現状の埋蔵その他の文化財の緊急保護対策とかみ合せて考えることもよい。これは研究面にも効果のあることである。中央博物館・地方博物館とも、館外の研究機関または研究者と連繫することが必要である。たえず新しい知識が供給されていなければならない。行政面でも重要であろうが、研究面でも停止してはならない。しかも、その研究も専門分野と教育分野の両面にわたることが必要である。

以上のことを加曽利にあてはめると、この博物館は、加曽利を中心とした「貝塚博物館」であり、周辺地域を合せた貝塚研究のセンターであり、同時に、その研究成果にもとづく教育を担当する。このために研究の交流、ものの交流がおこなわれ、学芸員等の人員は充分に確保され、経費はかかるであろうが、願わくば惜しみなく使えるような予算が組まれることを希望する。それは、日本の学術・教育の振興のためであり、この加曽利の博物館がその任を果すべき資格と価値を充分に保有しているからである。

（千葉市加曽利貝塚博物館協議会委員・）
早稲田大学文学部教授